20 7 -3

高知新聞

⑬

飛沫感染防ぐ箱量産へ

高知大非常勤講師 医療者向けに試作

新型コロナウイルス感染予防のため、医療従事者を飛沫感染から守る「エアロゾルボックス」の量産化に向け、高知大非常勤講師の佐々木康介さん(29)＝災害救急医療専門、香川県出身＝が高知市の工場との協力で試作品を作った。「医療器具も地産地消を目指したい」と話している。

エアロゾルボックスは、患者の頭部を透明のアクリル板で覆い、治療に当たる箱。医療現場で人工呼吸器の管を入れる際、患者の飛沫による感染から医療従事者を守る。

台湾の医師が考案し、設計図を無料で公開している。佐々木さんは「感染流行で量産の必要が出てくる。だが、県外発注だけでは時間や経費がかかる」と考えた。

県内で取り扱ってくれる業者を探し、最終的に産業機械のメンテナンスを行う吉村デンソー（高知市朝倉丙）が応じてくれた。5月から改良を重ね、高さ約50センチ、幅約50センチ、奥行き約40センチのエアロゾルボックスが完成。複数の箱を上から重ねられるように、場所を取らない作りにした。

佐々木さんは川崎医療短期大学（岡山県）から高知大医学部に編入。その後、県立大大学院へ。現在も県大の院生として勉強中。

日本災害看護学会でコロナ感染対策を議論したこともあり、「コロナでは医療者の感染が大きな問題となり、安全に医療提供ができる環境を第2波に備え整える必要がある。支援者を支援できる態勢を」と話している。

（村瀬佐保）

試作したエアロゾルボックスを見せる佐々木康介さん（高知大岡豊キャンパス）

高知新聞社提供